5/20/2005

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊ S. Ashina

キリスト教思想における自然諸問題

第一章　自然神学とその再構築

１．自然神学の成立とその意義　　２．中世から宗教改革

第一章　自然神学とその再構築

３．科学革命と自然神学

（１）近代キリスト教とニュートン

1. 近代キリスト教の基本的動向

トレルチ：古プロテスタンティズム(Altprotestantismus)と新プロテスタンティズム(Neuprotestantismus)の区別（プロテスタント時代の内的区分）

2. 教会史全体が１８世紀を期して新しい諸条件の下に突入し、近代的思惟の自立化と国教会的な生の統一の崩壊の結果、それ以来全般的に、教会史は統一的で完結した対象をもはや自らの前に持つことがなくなった。それと同様に、キリスト教の諸派の社会哲学もまた、見通しがたい分散と絶えず交代する依存性の下にあるのである。キリスト教諸派の活動する基盤は新たになった。それは、近代の市民的－資本主義的な社会と官僚的な軍事国家という基盤である。(Troeltsch[GS.1], S.965)

3. ４つの基本的特性（根本原理）

信仰の宗教(Glaubensreligion)、宗教的個人主義、心情倫理(Gesinnungsethik)、世俗への開放性(Troeltsch[GS.4], S.215-231)

4. 社会システムの変動

近代神学史とその発展過程を宗教戦争の時代の終わりの状況と関連づけたことは、エマヌエル・ヒルシュが彼の神学史においてなした功績である。……寛容の思想は１６世紀と１７世紀の恐ろしい信仰戦争の終局において戦い合った諸教派の全キリスト教的主張が挫折したことによって初めて広まった。この戦争がおおむね妥協によって終わったのち、キリスト教と社会との関係における新しい状況が事実上成立したのである。(Pannenberg[1997], S.25)

5. 「１７世紀が終わり、１８世紀と共に、ヨーロッパでは、すべてのものを捉える巨大な精神的変化が生じた」(Troeltsch[1906(1922)], S.600)

２　ニュートン科学と自然神学

（１）ニュートン研究と宗教の問題

6. 我々が適切な注意を払わねばならない事実は、物理学や数学の諸問題は１７世紀のたいていの人々にとって最大の関心事ではなかったし、またそれらはニュートン自身にとっても最大の関心事ではなかったことである。ニュートンは錬金術、教会史、神学、預言、古代哲学、そして「古代王国の年代誌」により多くの時間を費やしたのである。(Dobbs&Jacob[1995] p.7])

7. この至高の存在者は、宇宙霊魂(anima mundi)としてではなく万物の主(universorum dominus)としてあらゆる事物を統治する。そしてその支配のゆえに、主なる神(dominus deus)、パントクラトール（Παντοκρατωρ）と呼ばれるのが常である。というのも、神とは相対的な呼び名であって、それは僕(servus)に関連しているからである。そして神性とは、神を宇宙霊魂とする者が夢想するような、神の支配が神自身の身体におよぶことではなく、僕におよぶことだからである。(Newton[Principia], p.760)

8.

①神論における神の主権の強調：パントクラトールあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配、「主と僕」という枠組み

ルターやカルヴィンら宗教改革者における神の絶対的主権の思想との類似性、更に遡って、中世後期の唯名論・主意主義との関わりが指摘されている(Deason[1986], p.170)。「４世紀も以前に始められた神学の変革の頂点」(ibid.)

②無神論論駁のための神の存在論証

『プリンキピア』の総注の「私は仮説を作らない」という有名な言葉、いわゆる実証主義的テーゼ＝デカルト的な機械論的宇宙像（渦動説）に対する批判

ニュートンによるデカルト批判：デカルトの機械論とそれに基づく心身二元論が神の世界に対する直接的統治を否定することになり、それによって結局無神論を帰結するという判断（Newton[MS.Add.4003], pp.142-143, Westfall[1980], pp.301-303）

自らの新しい科学的知見に基礎づけられた神の存在論証によって無神論を反駁する

③自然哲学（単純さに基づいた「自然の類比」）とその神学的根拠（自然の秩序、単純さを可能にする秩序の神）

「確かにわれわれは実験に反して空しく夢想に耽ってはならないが、自然の類比(analogia naturae)から離れてもいけない。なぜなら、自然は単純(simplex)であり、常にそれ自身と一致しているからである」(Newton[Principia] p.553)

「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない」(ibid.:p.760)

（２）自然哲学あるいは自然神学

9. ニュートンは錬金術の中で機械論哲学との妥協を拒否するもう一つの考えに出会った。機械論哲学が物質は不活性であり機械的必然性のみが物質の運動を規定すると主張したのに対して、錬金術は自然現象の第一要因として物質における能動的原理の存在を主張した。(Westfall[1980], p.299)

10.自然の内の植物的と機械的、あるいは能動的と受動的という異なった自然哲学的な諸原理の全体を統合し支配する神

11.機械的化学と植物的化学とのニュートンによる区別は、ニュートンのデカルト的遺産によって生じた神学的問題の解決にとって決定的なものとして現れた。機械的化学は単に粒子の機械的な衝突と分離によって説明されるかもしれない。しかし、植物的生長によって自然が産出するすべての存在者の偉大な種に対しては、我々はさらにそれ以上の原因に頼らねばならない。究極的に原因は神である。植物的化学の領域の内に、世界と物質の継続的な神的手引きの領域、つまり摂理的配慮の領域が見いだされるかもしれな

い。神の意志こそが物質の諸粒子の運動を方向付け、またそれらを秩序づけられた配置へと導くのである。(Dobbs&Jacob[1995], p.30)

12.物質の受動性

物質に能動的な力を内属させることが神に対する物質の依存性を弱めることになり、無神論を帰結する

13.ニュートンの神は単なる哲学者の神、つまり、アリストテレス主義の非人格的で無関心な第一原因ではなく、あるいはまたニュートンにとって神はデカルト的な超然とした世界に不在の神ではない。いずれにせよ、ニュートン自身がそうあることを欲した神は、聖書の神であり、神によって創造された世界の有効な主にして支配者なのである。(Koyré[1957], p.225)

14.神という言葉は神の形而上学的な本性にではなく神の支配に関係している。それは相対的な言葉であり、神の僕としての我々に対して関係している。この言葉は、主や王と同じ意味を有しているが、より高い度合いにおいてそうなのである。なぜなら、我々は、我が主、我々の主、汝の主、他の主たち、王の王、主の主、他の主たち、主の僕たちと言い、他の主たちに仕えるように、我々は、我が神、我々の神、汝の神、他の神々、神の神、神の僕たちと言い、他の神々に仕えるからである。(Yahuda MS.15.7, fol.154r, in: Manuel[1974], p.22)

４．近代イギリスと自然神学の伝統

１　ニュートン主義と理神論

（１）ニュートン主義とその影響

15.「＜ニュートン主義者＞の称号は、ニュートンの著作の翻訳を行いあるいは神の力と権能についてのニュートンの理論を講壇から説教することをニュートンが認めるほど十分に彼が信頼した者たちに属している」(Dobbs&Jacob[1995] p.66)

16.ニュートン主義的キリスト教(Newtonian　Christianity)、「新しい科学に基礎づけられたプロテスタンティズムの新しい改訂版」の担い手となった思想家たち(ibid.:pp.67-70,98)

ニュートン主義の影響範囲：トーランドのような理神論者やユニテリアン、フリーメイソンを含む１８世紀の啓蒙思想全体に及んでいる（→ニュートン主義的啓蒙。 Jacob[1997] pp.73-96）

（２）ニュートン主義の社会的機能と広教主義

16. 新しい社会システムの形成期（システム変動の時代）

無神論論駁のための理論的土台としてのニュートン主義（その具体例としての「ボイル・レクチャーズ」）＝新しい経済的政治的システムの形成過程において、そのシステムの正当化としてイデオロギー的に機能

17.「広教主義とは、１７世紀に起源を持ち、１８世紀に最盛期をむかえ、そして１９世紀に新たな発端を開いたイングランド教会の神学的教会的な流れを表している。その特徴を厳密に規定することは困難である。なぜなら、それは個別的な変化に対して本質的に大きな余地を残しているからであり、教会の諸派の枠組みにおける中道派を意味して

いるからである。……その思想は独立した仕方でケンブリッジ・プラトニストの神学的宗教哲学的学派に受け継がれ、保守的に解された＜自然宗教＞の方向で展開された」（Schmidt［1957（1986）］1/1422］）

18.広教主義のキリスト教＝ニュートンの「真の宗教」の理念

宗教的にはローマ・カトリック教会と急進的なピューリタニズムとの中間的で穏健な国教会制度を擁護し（リベラルな国教主義）、政治的には専制的な絶対王制と共和制との中道を目指し、また経済的には市場経済のシステムを認めつつもその倫理化を要求する。

（３）ボイル・レクチャーズの自然神学

19.ボイル・レクチャーズ：ロバート・ボイルの遺言で創設された宗教擁護のための講演会とニュートン、ニュートン主義

第一世代のニュートン主義者として著名なベントリー、クラーク、デーラム、ホイストンらはいずれもこのボイル・レクチャーズの講演者として活躍した人物

20.「彼らの論証に対するニュートンの態度は明白に好意的であり、確かにニュートンは政治的また人間的には彼らの暗黙のお世辞に対して無関心ではなかった。しかし、とくに彼はこれらの演技にはしばしばきわめて批判的であった。……ニュートンはクラークの哲学的定式に常に完全に満足していたわけではない」（Manuel［1974］ p.35）。

21.「わたしが我々のシステム（世界体系）についての論文を書いたとき、わたしの目は思慮深い人々にとって神性の信仰に役立つような諸原理に向けられていた。この論文がこの目的にとって有益であることを見ることに勝る喜びはありません」（Newton［1692］p.280）

22.人間本性の価値に過度の評価を与えることなしに、我々は有徳で宗教的な人間の魂が太陽やその惑星や世界のすべての星よりも大きな価値があり卓越性を有することを肯定できるかもしれない。（ibid.:p.356）

天体がこのようなすばらしい物体の力ある制作者そして統治者という偉大な観念とそれに対する崇拝とを我々の内に生み出し、我々の心を刺激してその存在者に対する敬愛と讃美へと高めるということを、もし諸君が語るとすれば、諸君はまさに真実かつ適切に語っているのである。（ibid.:p.357）

我々は次のように合理的に結論づけることができるであろう。つまり、現在の組織（世界システムの）は物質的原因の必然性や想像上の偶然という目的のない混乱から生じたものではなく、知性的で善なる存在者から生じたのであり、この存在者は現在の組織を選択と意図（design）によって特定の仕方で形成したのである。（ibid.:p.361）

「もし、いくつかの惑星の速度が太陽からの距離は同じままで現在の速度より早かったりあるいは遅かったりしたならば、……それらの惑星は今の同心円軌道を回転することはなったであろう」（ibid.:pp.363-364）

このような詩（ヴェルギリウスのアイネーイス：論者補足）が永遠的であり、最初の作者も原文もなしにコピーからコピーへと転写されてきたことなどまったく信じがたいことであるように、人間の身体の組織が……最初の親とその創造者なしに父から息子へと伝えられ転写されてきたとは同様に信じがたい。（ibid.:p.394）

23.ベントリーの議論のポイント

①議論は＜「世界システムに発見されたみごとな秩序と美」→「偶然性や機械論的因果性といった無神論的な説明方法の排除」→「残る説明可能性としての神」＞というプロセスで展開されるが、これは確かに新しい科学によって知的に武装した無神論を論駁するための戦略としてはすぐれている。つまり、論敵も認めざるを得ない議論の場（世界の秩序）を設定し、論敵の議論の前提を一つ一つ論破する（次第に議論のハードルを引き上げるというレトリック）という点で、ベントリーの議論はキリスト教の教説を聖書や教会の権威によって一方的に宣言するのとは明らかに異なっており、少なくとも新しい科学的知見に関心がある教養人には一定の説得力があったように思われる（→教養としての自然神学)。

②「意図からの論証」という神の存在論証、しかもとくに世界秩序とその神的特質を強調するという論法が選らばれたことは、それがニュートン力学に結びつきやすかったということだけでなく、これが社会的イデオロギーとして機能するのに適していたことが留意されねばならない。高い蓋然性の指摘であって、神の存在論証と言うよりも神の説明と考えるべきであろう。

２　１８世紀　自然神学への批判・懐疑

ヒューム（哲学)、ウェスレー（キリスト教)、ラプラス（物理学）

（１）ヒュームの自然神学批判

J.C.A.Gaskin(ed.), *David Hume. Principal Writings on Religion incliding Dialogues Concering Natural Religion and The Natural History of Religion*, Oxford University Press 1993

斎藤繁雄　『ヒューム哲学と「神」の概念』（法政大学出版局）

Terence Penelhum, Themes in Hume. The self, the Will, Religion, Clarendon Press 2000

中才敏郎編　『ヒューム読本』（法政大学出版局）

Demea, Cleanthes,Philo

in this profane and irreligious age,

24. This (the nature of God), from the infirmities of human understanding, to be altogether incomprehensible and unkown to us. mysterious to men.

Finite, weak, and blind creatures, we ought to humble ourselves in his infinite presence, and, conscious of our frailties, adore in silence his infinite perfections, (43)

we ought never to imagine, ...that his perfections have any analogy or likeness to the perfections of a human creature. (44)

25. 宇宙論的あるいは目的論的神の存在論証に対して

Nothing exists without a cause; and the original cause of this universe (whatever it be) we call God; (44)

one great machine

By this argument a posteriori, and by this argument alone, do we prove at once the existence of a Deity, and his similarity to human mind and intelligence. (45)

the plan of a watch or house.

The adjustment of means to ends is alike in the universe, as in a machine of human contrivance. The causes, therefore, must be resembling. (48)

resemblance

an argument from experience (51)

But if we stop, and go no farther; why go so far ? Why not stop at the material world ? How can we satisfy ourselves without going on *in infinitum* ? And after all, what satisfaction is there in that infinite progression ? (63)

I have found a Deity; and here I stop my enquiry. Let those go farther, who are wiser or more enterprising. (65)

the experimental argument

Like effects prove like causes. (67)

But were this world ever so perfect a production, it must still remain uncertain, whether all the excellencies of the work can justly be ascribed to the workman. (69)

multiply causes

But while it is still a question, whether all these attribute are united in one subject, or dispersed among several independent Beings. (70)

The world plainly resembles more an animals and vegetables, than it does a watch or a knitting-loom. Its cause, therefore, it is more probable, resembles the cause of the former. The cause of the former is generation or vegetation. (78)

I have still asserted, that we have no data to establish any system of cosmogony. Our experience, so imperfect in tself, and so limited both in extent and duration, can afford us no probable conjecture concerning the whole of things. But if we must needs fix on some hypothesis; by what rule, pray, ought we to determine our choice ? (79)

To say that all this order in animals and vegetables proceeds ultimately from design is begging the question; nor can that point be ascertained otherwise than by proving a priori... (81)

＜ヒュームにおける自然神学批判のまとめ＞

懐疑論：神の存在論証に関しては、判断中止を唱える。すべての議論は仮説に基づき、論証は成功しない。論理的に破綻している。
どんな類比でも可能。類比は一つではない。

理神論：経験からの論証（宇宙論的と目的論的・意図からの論証）の有効性を認める。トマスの５つの道と基本は同じ。

有神論：経験からの論証は受け入れない（類比は成り立たない）。有効なのは、ア・プリオリな論証である。

26. １７世紀のニュートン・ニュートン主義

正統主義／自然神学／理神論／懐疑論・無神論・唯物論

１８世紀のヒューム

正統主義／自然神学・理神論／懐疑論／無神論・唯物論

（２）ウェスレー

27.伝統的なキリスト教信仰、あるいは正統主義からの批判

28.ニュートン主義のいわば意図せざる無神論的作用

１８世紀になるとニュートン主義者の中より自由思想（唯物論、汎神論、無神論、フリーメイソンなど）に接近する者が現れる。

29.「トーリー党的思想家はますます、ニュートン主義者、ことによるとニュートン自身でさえも、新しい機械論哲学を自然宗教の基礎として公言することによって、実際のところすべての宗教を土台を掘り崩してしまったと確信するようになった」(Jacob[1986] p.250)

30.「形而上学的＜合理主義＞に対する敵対者であるウイリアム・ロー、ジョージ・ホーンとジョン・ウェスレーはニュートン主義の物理神学(physico-theology)の自己満足をこてんぱてんにやっつけた。それはちょうど、詩人クリストファー・スマートやウイリアム・ブレイクがそれに引き続いて発展させられた不敬虔な体系化を呪ったようにである。この意味は、彼らに＜反ニュートン主義的＞神秘主義者というレッテルを貼ることによって、本質的に異なった五人の思想家に思想の統一性を重ね合わせようということではなく、イギリスにおける初期の反啓蒙主義の経験の持つダイナミズムについて示唆することなのである」(Young[1998] p.120)

31.１８世紀のニュートン主義批判あるいは反啓蒙主義という流れの背景

「ニュートン的な科学とキリスト教の総合」の１８世紀における変容プロセス

（３）ラプラス

32.物理学の自然神学からの離脱＝自律、ラプラスの魔

33.聖俗革命

＜文献＞

Bentley[1693]：Richard Bentley, A Confutation of Atheism from the Origin and Frame of the World., in: I. Bernard Cohen（ed.), *Isaac Newton's Papers & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harverd Univ. Press 1958

Burnet[2000]：Gilbert Burnet（ed.), *The Boyle Lectures（1692-1732）Vol.1-4*, Thoemmes Press

Deason[1986]：Gary B. Deason, Reformation Theology and the Mechanistic Conception, in: Lindberg/Numbers[1986]

Force/Popkin[1999]：James E. Force and Richard H. Popkin（ed.), *Newton and Religion. Context, Nature, and Influence*, Kluwer Academic Publishers 1999

Jacob[1976]：Margaret C. Jacob, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, Gordon and Breach [1986]：*Christianity and the Newtonian Worldview*, in: Lindberg/Numbers[1986]

[1997]：*Scientific Culture and the Making of the Industrial West*, Oxford Univ. Press

Dobbs&Jacob[1995]：Betty Jo Teeter Dobbs and Margaret C. Jacob, *Newton and the Culture of Newtonianism*, Humanities Press

Koyré[1957(1982)]：Alexandre Koyré, *From the Closed World To the Infinite Universe*, The Johns Hopkins Univ. Press

Lindberg/Numbers[1986]：David C. Lindberg and Ronald L. Numbers(ed.), *God & Nature. Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, Unv. of California Press

Manuel[1974]：Frank E. Manuel, *The Religion of Isaac Newton. The Fremantle Lecture 1973*, The Clarendon Press

松山[1997]：松山壽一　『ニュートンとカント　力と物質の自然哲学』（晃洋書房）

村上[2002]：村上陽一郎　『近代科学と聖俗革命　新版』（新曜社）

長尾[2001]：長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』（名古屋大学出版会）

Newton[1692]：Letter I. To the Reverend Dr. Richard Bentley. Decemb.10,1692, in:I. Bernard Cohen（ed.), *Isaac Newton's Paper & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harverd Univ. Press　1958

[1693]：Letter IV. To Mr. Bentley, in: ibid.

[Principia]：Alexandre Koyré and I.Bernard Cohen（ed.), *Isaac Newton's Philosophiae Naturalis Principia Mathematica. The Third Edition（1726）with variant readings. Volume II*, Cambridge at the Univ. Press 1972

[MS.Add.4003]：De Gravitatione et aequipondio fluidorum, in: A. Rupert Hall and Marie Boas Hall（ed.), *Unpublished Scientific Papers of Isaac Newton. A selection from the Portsmouth Collection in the Univ. Library*,　Cambridge Univ. Press　1962（1978）

[1733]：*Observations upon the Prophecies of Daniel, and the Apocalypse of John*, London, reprinted by the Oregon Institute of Science and Medicine　1991

Pannenberg[1997]：　Wolfhart Pannenberg, *Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Scheleiermacher bis zu Barth und Tillich*, Vandenhoeck & Ruprecht

佐々木[1992]：佐々木力『近代学問理念の誕生』（岩波書店）

Schmidt[1957(1986)]：M. Schmidt, Art., Broad Church Party, in: *Die Religion in Geschichte und Gegenwart. 3 Auflage Erster Band*, J.C.B.Mohr

Troeltsch[1906(1922)]：Ernst Troeltsch, Protestantisches Christentum und Kirche in der Neuzeit, in: Paul Hinneberg（hrsg.), *Die Kultur der Gegenwart. Ihre Entwicklnug und ihre Ziele*, Leipzig

[GS]：*Gesammelte Schriften.1-4*. Aalen 1912-1925（1977-1981）Scientia Verlag　1925（1981）

Young[1998]：B.W.Young, *Religion and Enlightenment in eighteenth-century England. Theological Debate from Locke to Burke*, Clarendon Press

Westfall[1980]：Richard S. Westfall, *Never at Rest. A Biography of Isaac Newton*, Cambridge Univ. Press